

鑄貨準備と蓄蔵貨幣

井 汲 明 夫

はじめに

「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」¹⁾ (S. 198 ; 114) と言う『経済学批判』の周知の命題は、余りにも明解であるから、ここでマルクスが述べているように鑄貨準備は蓄蔵貨幣には含まれないと解釈するのが蓄蔵貨幣論に関してはまずは常識的な理解であり、通説であるといつてよからう。しかし、『経済学批判』ではマルクスはこのように両者を明確に区別しているが、……『資本論』第三巻」や『資本論』第二巻でも同様に鑄貨準備に該当すると見られるものを『蓄蔵貨幣』として述べている」し、また『批判』の『原初稿』では、『批判』とちがって鑄貨準備が蓄蔵貨幣として記述されている」ように読める²⁾ (上 S. 205) ため、そこからマルクスの見解が一貫していなかったとの概念変更説や広狭二義説、その他の解釈が現われたことは周知のことである。

これを「誤解『体系』」(上 S. 208) であるとする三宅義夫は、『経済学批判』原初稿での貨幣蓄蔵論解釈について³⁾において、『批判』や『資本論』では Münzreserve (鑄貨準備) と Reservefonds von Münze (鑄貨の準備金) とは一貫して同一の概念を示す術語であり、それらは決して蓄蔵貨幣を示すものとして用いられてはおらず、他方では「原初稿」で用いられている Vorrat von Münze (鑄貨備蓄) という術語は、しばしば「鑄貨準備」と同一視されているがそれは誤解であり、蓄蔵貨幣に属する購買手段の準備金概念を示すとの解釈から、マルクスの上記の諸著作の内容を執拗な程に詳細に検討し、マルクス一貫説を示そうとした⁴⁾。

ところがこの論文の最後の「補論」(下 S. 223 以下)において三宅は、この論文の原稿の執筆後

1) K. マルクス『経済学批判』1859. 以下では『経済学批判』からの引用は引用文の後に MEGA (Marx/Engels Gesamtausgabe, Dietz Verlag Berlin) 版 II/2 および MEW (Marx-Engels-Werke, Dietz Verlag Berlin) 版 Bde 13の原典の頁数のみを (S. 123 ; 111) のように記し、一々注記しない。訳文は、邦訳「資本論草稿集」3 (大月書店) および本稿で批判の対象にする三宅の論文(注2)中のものを必要に応じて適宜用いるが、必ずしも同一ではない。原文を付記する場合は MEW 版の綴りによる。

2) 三宅義夫「『経済学批判』原初稿での貨幣蓄蔵論解釈について」(上), (下)「経済」(新日本出版社) 1986年5月号, 7月号。この論文からの引用は引用文の後に (上 S. 222) (下 S. 222) のように記し、一々注記しない。なおこのような特殊専門的な論文を「経済」のような一般読者向けの雑誌に寄稿した理由については (上 S. 209~10) 参照。

3) 注2参照。

4) 以下各ドイツ語の術語に該当する訳語としては、括弧内に記した訳語を用いるが、これは形式的な区別をつけるための便宜上のものにすぎず、理論的な要請によるものではない。

に、マルクスの、いわゆる「23冊のノート」(1861~63年)⁵⁾の「第15冊」に彼にとっては意外な記述があることを知ったとして、それまでの見解の一部を急拠修正した。すなわち、これまで述べてきた Münzreserve (鑄貨準備) の概念に相当する術語は Münzreserve だけであり、これに反して Reservefonds von Münze (鑄貨の準備金) と Vorrat von Münze (鑄貨備蓄) とは共に購買手段の準備金を表わす術語であるとの新解釈である。

この「ノート第15冊」の「商業資本。貨幣取扱業に従事する資本」の項目の中でマルクスは「私がすでに第一分冊で示しておいたように」として『経済学批判』ですでに述べたこととして、蓄蔵貨幣の諸形態について要約している。すなわち「蓄蔵貨幣の第一の形態、すなわち蓄蔵貨幣の第一の機能は、鑄貨の準備金 (Reservefonds von Münze) として役立つというそれであった。」「第二の機能は、諸支払いのための準備金 (Reservefonds für die Zahlungen)」「第三の機能は、世界貨幣の準備金 (Reservefonds des Weltgelds)」「最後に……それ自体としての蓄蔵貨幣 (Schatz als Solcher) であった。」⁶⁾ この記述から三宅が読みとったことは、「鑄貨準備」は「鑄貨の準備金」とは異なりとマルクス自身が述べている、という新解釈である。なるほどこれは「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」という『批判』の記述と、「蓄蔵貨幣の第一の機能は、鑄貨の準備金として役立つというそれ」という「ノート」の記述とを矛盾のないものとして形式的に解釈しようとするれば、必然的に出てくる結論ではある。だからまた「Vorrat von Münze が Münzreserve ではないことをマルクス自身が語っていることになる。」(下 S. 224) のであって、これまでの三宅の主張の正しさを裏付けているかのように見える。

しかしそのことの帰結としては、今度はこれまでの三宅の『批判』や『資本論』の解釈の変更をせまられることとなろうし、これまでの解釈が恣意的であったとの批判を避けることはできないだろうが、いまこの点はひとまず措くとして、これまで同一の概念であることを誰一人として疑わなかった「鑄貨準備」と「鑄貨の準備金」とを、マルクスの記述の中でどうやって分離するのかという新たな問題が生じることとなった。

これまで、鑄貨準備概念については『批判』の「a 貨幣蓄蔵」の第一段落で述べられているということには誰も異論がなかったであろう。以下での記述にとって大変重要であるので、次に『資本論』第Ⅱ巻でも引用されている、その主要部分の全文を引用しておく。

「貨幣が鑄貨としてたえず流れるためには、鑄貨はたえず貨幣となって凝固しなければならない。鑄貨のたえない流通の条件は、鑄貨が流通の内部でいたるところで発生するとともに流通の条件をなす鑄貨の準備金 (Reservefonds von Münze) ——その形成・配分・解消・再形成はつねに交替するのであって、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する——という形をとって、

5) 「経済学批判 (1861~63年草稿)」MEGA II/3, 1~6. 邦訳「資本論草稿集」4~9 (9は未刊)

6) MEGA, II/3.5, S. 1575-76.

大なり小なりの部分がたえず停滯することである。アダム・スミスは、鑄貨の貨幣への、貨幣の鑄貨へのこの間断ない転化を次のように表現している。すなわち、どの商品占有者も、彼の売る特殊な商品とならんで、彼が買うための手段である一定額の一般的商品をつねに貯えておかねばならない、と。すでにみたように、流通 $W-G-W$ では、第二の環 $G-W$ は、一度に行なわれなくて時間的にあいついで行なわれる一連の購買に分裂するから、 G の一部分は鑄貨として流通するのに他の部分は貨幣として休止する。貨幣はこの場合には實際上、一時停止させられた鑄貨にほかならず、流通している鑄貨量の個々の構成部分は、たえず交互に、あるいは一方の、あるいは他方の形態で現われる。だから、流通手段の貨幣へのこの第一の転化は、貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機を表わしているのである。」(S. 189~190; 104) 見られるように、ここで述べられている対象は「鑄貨の準備金」であることは明白なので、ここから「鑄貨準備」を救い出すために奇策ともいえるべき解決法を三宅は考えついた。すなわち、説明の前半、A・スミスの引用符のない引用までが「鑄貨の準備金」に関するもの、後半「すでにみたように」以下が「鑄貨準備」に関するものというものである。

その根拠というのは、前半部分には「いつかどこかで記しておこうと思っていたことであるが、じつは不審な点が二つあったのであって、一つは、……『資本論』第一巻の『a 蓄蔵貨幣』のところで……貨幣蓄蔵の……『必要』について述べているのと、ほぼ同じであること……いま一つは……A. スミスの言葉を、マルクスは『グルトリッセ』のなかでは『貨幣が自立的価値として機能する蓄蔵の原理は、……貨幣流通にもとづく交換の場合に必然的である』と記してそこで掲げているのであって……、ともかくさきには貨幣蓄蔵に関連させて掲げていたのと同じ言葉を『批判』のここで掲げていることは、不審であった。(中略) 右の二点から、マルクスはここで購買手段の蓄蔵について述べているのではないかという疑念を抱いてしかるべきはずである」(下 S. 225~6) というものである。これに対し、後半が鑄貨準備に固有の説明であることについては「suspendierte Münze (一時停止させられた鑄貨) ——すなわち Münzreserve (鑄貨準備)」(下 S. 225) と断定する以上の根拠は示していない。むしろこの部分では「流通している鑄貨量の個々の構成部分」について述べられている、と主張する方がいくらか説得的ではあろう。というのも問題の「鑄貨準備を蓄蔵貨幣と混同してはならない」は、「(鑄貨準備は) それ自体、いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしている」(S. 198; 114) と一体の記述であるからである。

三宅としてはこの「新説」はそれまでの彼の主張の正しさを証明するものと考えているようなのだが、私が見るところではむしろこの発見はその論理的帰結として、彼の「鑄貨準備」概念自体の成立根拠を否定し、「旧説」はおろか「新説」までをも根底から覆してしまう性格のものなのである。論文で例示されているマルクスの諸記述をすなおに比較すれば、むしろ「鑄貨準備」「鑄貨の準備金」「鑄貨備蓄」の三者を区別する理由は言葉が違うという以外にはなく、それらはすべて蓄

蔵貨幣に属する購買手段の準備金を表わしていると捉えるのが最も妥当であることがわかる。三宅の意図に反し、この問題に対する三宅の解明が客観的に明らかにしているのはこのことであるように思われる。

しかしそうだとすると、それはそれで、余りにも明解な「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」以下の『批判』の記述をどう解釈するのが新たな問題になる。

私はむしろ三宅とは逆に上の記述の意味を問い直すことから、問題解決の手掛りを得た。とはいえ私がこのような考えに辿りついたのは、三宅の論文に刺激されてに他ならない。「蓄蔵貨幣論」に関しては「素人」である私が、敢えてこの「スコラ的」な問題に踏み込もうとするのは、恩師である三宅の論文の内容それ自体はまったく納得し難いものではあるが、それにもかかわらず、そこでは長年疑問に思ってきた鑄貨準備概念について、問題解明の重要な手掛りが与えられていると考えられるからである。本論は、三宅の「新説」がそのものとしては成り立たないことを明らかにし、その上で三宅から得た示唆を手掛りに、自分自身をも含めてのこれまでの「鑄貨準備」概念を再検討することを主たる目的とするものである。従って蓄蔵貨幣に関する様々な論争に一々立ち入ることとはしないし、また私のなし得ることではない。本論では、恩師である三宅に対して、かなり非礼な言辭を弄することになるかも知れないが、それは私の不徳の致すところではあるにせよ、遠慮した表現を考案していて内容が弱まることを恐れるからでもある。横綱に対して遠慮している余裕などないのである。ご寛恕をお願いしたい。

1. 簡単な疑問

今ここで、新三宅説に百歩譲るとしても、とりあえず次のような疑問が残る。

1. 鑄貨準備が蓄蔵貨幣ではないのならば、本来はどこで論ずべき概念か。
2. 「貨幣蓄蔵」の項の殆ど終わり近くになって、突然「鑄貨準備」という術語が新登場するのは、余りに唐突ではないか。
3. 「すでにみたように、……」以下の記述のみが「鑄貨準備」についての説明であるとの根拠はどこに示されているのか。
4. 旧説では、先に引用した「鑄貨の準備金」の説明全体をもって「鑄貨準備」の説明としていたが、新説では十全な「鑄貨準備」概念をどこから得るのか。
5. 『批判』では「鑄貨準備」概念なしに先ず「鑄貨の準備金」概念が規定され、その後で「鑄貨準備」概念が規定されているとするのは順序として不自然ではないか。
6. 「流通手段の貨幣への第一の転化」は「鑄貨準備」のみを形成するのか、それとも「鑄貨の準備金」をも形成するのか。
7. 三宅説がかくまでも重要視する「鑄貨準備」が、結局『批判』以外にはまったく登場しないの

はなぜなのか。「鑄貨の準備金」が「鑄貨準備」ではなく、「ノート第17冊」の2カ所での「鑄貨準備」⁷⁾は、内容的には「鑄貨準備」ではないとする(下 S. 227)ならば、そういうことになる。他方では「鑄貨の準備金」は『批判』ではただ1カ所だけにしか登場しないのはなぜなのか。

8. 「鑄貨準備」と、「鑄貨の準備金」および「鑄貨備蓄」についての説明が、三宅の例示しているように、殆ど同一の文章で表現されているが、これらの殆ど同一の文章表現をすべて別内容の文章として分離するのは余りに不自然ではないか。

II. 鑄貨準備概念の出自

初めに問題を形式的な側面から捉えてみよう。この場合にはその方が問題の所在が明確になると思われるからである。

我々の「鑄貨準備」概念は、先に引用した部分を中心とする『批判』の「a 貨幣蓄蔵」の第一段落から得られている。この一つの段落でなされている説明の前半を「『鑄貨準備』に対する説明としても十分に通用する」がしかしマルクスの「意図」はそうではなかった(下 S. 226)とするならば、たとえそれを認めるにせよ、我々はそれ以前にどこからか十全な「鑄貨準備」の概念を得ていなければならないことになる。

三宅は、この部分に続く「すでにみたように、……」以下の記述が「鑄貨準備」の説明だというが、しかしこの部分では一つの販売が、多くの購買に分裂するという流通の側面から、「鑄貨の準備金」が形成される必然性を述べているのであり、それ以前とは本質的に異なることが述べられていると捉えることは困難である。三宅の新解釈は、前半が三宅の鑄貨準備概念に一致しないことが明らかになってしまったから、かろうじて残されている後半部分に責任を負わせて無理な読み込みを行なっているのだとしか理解しようがない。

すなわち先に見たように、この部分が「鑄貨準備」の説明であるとした根拠は、「Suspendierte Münze (一時停止させられた鑄貨) ——すなわち Münzreserve (鑄貨準備)」との断言以外にはない。しかし三宅自身、『批判』で「『貨幣は、この場合には實際上、一時停止させられた鑄貨にほかならない』と述べているのと同じ文が、『原初稿』で述べられていることを見て」「原初稿」でも「鑄貨準備について述べていたものと理解」するのは「誤解」である(下 S. 211)と主張しているのだから、「一時停止させられた鑄貨」との文があることをもって「鑄貨準備」に関する記述であると断定することはできないはずである。更に内容的にも、この部分が三宅のいう「鑄貨準備」についての記述であると読むことには大変な無理があるのだが、そのことについてはまた後に触れよう。ともあれ、この部分だけでは「鑄貨準備」についての説明としては極めて不十分なことは三宅も認めざるを得ないだろう。また尻尾をちぎられてしまった「鑄貨の準備金」の記述も極めて不充

7) MEGA, II/3.5, S. 1698, 1735.

分なものとなってしまうので、こちらの方もどこかで落し前をつけてもらわなくては浮ばれないことになろう。我々は一体どこから十全な「鑄貨準備」の概念を得ればよいのだろうか。

前半部分について「不審な点」とした論拠も、『批判』のこの部分を一貫した記述としてすなおに読めば、むしろ「鑄貨の準備金」は「鑄貨準備」とは異なることを証明するよりも、のちに見るように「鑄貨準備」についてのこれまでの三宅の理解に「不審な点」が生じてくることを気付かせるものなのである。しかし三宅の「鑄貨準備」概念は、細部はともかく、これまで我々に共通の理解でもあった⁸⁾。

『資本論』第Ⅱ巻⁹⁾での「鑄貨の準備金」の説明のところでは、先に私が引用した部分と同じ部分が『批判』から引用されている(K II. S. 346)。その事は三宅も指摘しており、更に引用はエンゲルスによるものではないかと推測している(上 S. 207)が、この引用を前半部分だけに限らなかったことはマルクスの「意図」に反するものなのだろうか。ところで、三宅はこの第Ⅱ巻の部分で、「蓄蔵貨幣形態にある貨幣と區別して『鑄貨の停滞的準備金(die stagnierenden Reservfonds von Münze)』という言葉を使っている箇所」(上 S. 207 強調 井汲)と、何の根拠も示さずに断言しているが、私の見るところ、ここでは「鑄貨の準備金」は明白に「蓄蔵貨幣」に含まれるものとして述べられている¹⁰⁾。すなわち、関係のある語句だけを辿ってみれば「必要な追加貨幣は……によってか、または蓄蔵形態から流通形態への貨幣の転化によって、得られなければならない。このあとこのほうには、……、あるいはまた……だけが含まれているのではない、——それだけではなく、鑄貨の停滞的準備金が節約されるということも含まれているのである。」(K II. S. 346 強調 井汲)となっており、「鑄貨の準備金」が蓄蔵貨幣形態にあることを否定しているなどと読むことは到底できない。この直後に『批判』からの引用が続く。だからまた、この引用が三宅の推測通りエンゲルスによるものであるならば、『批判』での「鑄貨の準備金」をマルクスが蓄蔵貨幣として述べていたと「読んだ人はエンゲルスを含めて一人もいなかったのではないか」(下 S. 225)との推測はまったく当たっていないことになる。一人もいなかったのは、同じ説明の前半と後半が、それぞれ別の概念についての説明であると読んだ人である。もしも引用がマルクス自身によるものであったならば、彼は自分自身の「意図」に反したことになる。

附随的な問題にもふれるならば、先の『批判』の当該箇所の段落の終わり近くで「流通手段の貨幣へのこの第一の転化」と述べられているが、これを「鑄貨準備」にのみ係わる記述だとすると、

8) 例えば、久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』12(大月書店1980.10) S. 115 f) 参照。

9) 以下での K. マルクス『資本論』第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ巻からの引用は引用文の後に MEW 版 Bde 23~25 の原典の頁数のみを(KI. S. 111)のように記し、一々注記しない。訳文は、邦訳「マルクス=エンゲルス全集」(大月書店) 23~25巻のものを用いるが、必ずしも同一ではない。

10) もっとも新説では、それで異論のないことになるはずだが、それはそれで上記の判断と矛盾し、三宅の解釈の恣意性を示すことになってしまし、旧解釈への固執は、それはまたそれで別の恣意的解釈となってしまう。

その前に述べられていた「鑄貨の準備金」は第二の転化でなくてはならないことになり、まったく非論理的に展開された記述になってしまう。

また、そもそもここで「鑄貨準備」なる術語が登場しないのはなぜなのか。ただ単に忘れただけなのか。ここで術語を明示しておかずに数ページ後になって「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」といったところで、世界中の読者はこの「鑄貨準備」については三宅の指示している箇所ですべて述べられているのだということをどのようにして知ることができるのだろうか。現に三宅も「最初からそういう区別をして書いている事を承知して読むのであれば、識別を求めることはまず無理であろうと思われる。」(下 S. 226) と述べている。マルクスにとってもそれは無理であり、自分の死後に発見された自分の意図など、とても生前には気がつきようがなかったであろう。

三宅自身、今まで「三回ほどマルクスの貨幣論の『原典解説』をしたが、いつの場合もこの両者(鑄貨の準備金と鑄貨準備)を同じものとして扱っていた。」(下 S. 225 括弧内 井汲)し、この論文でも、『批判』でこの鑄貨準備についてまず述べているのは……『3 貨幣』の『a 貨幣蓄蔵』の考察の最初のところである。(上 S. 206) と述べ、その直前で『批判』で説明している『鑄貨準備』というのはつぎのようなものである。」として『批判』の内容を三宅流に噛みくだいた説明を試みている。更に「参考のために掲げておくと、マルクスは『経済学批判』のなかで『鑄貨準備』についてつぎのように述べている。」(上 S. 224) としているところでも、先の私の引用と同じ範囲を、若干省略して引用している。ただここで興味深いことは、上の説明でもこの引用でも一つのW—Gが多数のG—Wに分裂する問題が省かれていることである。ここに三宅の「鑄貨準備」概念の特徴が表われているが、それについては後に詳しく見よう。

上に見たように、間違いなくもともと三宅も『批判』の「鑄貨の準備金」についての説明から、自分の「鑄貨準備」概念を得たのである。それによって正しい概念を得ることができたか否かはとにかくとして、それなくしてはマルクスの「鑄貨準備」概念を明示することは不可能である。従って、この部分の前半は「鑄貨準備」の説明を意図したものではないと主張することは、自らの概念の出自自体を否定してしまうこととなり、たらいの水と一緒に赤子を流してしまっているのである。

むしろ旧三宅説や通説の通り「鑄貨準備」と「鑄貨の準備金」とはもとより同一の概念なのであり、だからこそ『批判』で数ページ後に新登場する「鑄貨準備」なる術語が、いささかの表現の違いにもかかわらず「鑄貨の準備金」を指しているのだということは誰にでも直ちに理解できたのである。更に「ノート第15冊」に対する三宅の指摘によって、我々はこの「鑄貨の準備金」は「蓄蔵貨幣」に含まれることを明確に知ったのであるが、なおまた論文の最後で指摘されている「ノート第17冊」の「Münzreserve」という用語について見てみれば、このことは一層明白となる。

後者について三宅は「これは『批判』で述べている Münzreserve (鑄貨準備) と同じ意味」ではなく「まったく便宜的に鑄貨準備という語を使ったのであろうと思われる。こういう使い方をす

ると、この Münzreserve はさきの Reservefonds von Münze と同じものになってしまうのであるから、あまりに便宜的すぎるのであるが、公表用の文でないことを考慮すれば、また便宜的使用であることは明らかであるので、とり立てて問題にする要はないであろう。」(下 S. 227) と付記している。だが本当は何が「明らか」なのであろうか。

三宅の指摘する「Münzreserve」という用語は2カ所あり、このうちの一方は「商業資本、貨幣取引業に従事する資本」について述べている所であり、そこでは「資本の一定の部分は絶えず蓄蔵貨幣として(鑄貨準備、すなわち購買手段の準備金(Münzreserve, i. e. Reserve von Kaufmitteln)や支払い財源つまり支払いのための準備金として)存在しなければならない」¹¹⁾と、「鑄貨準備」をわざわざ「すなわち購買手段の準備金」として指示した上で、「蓄蔵貨幣」として扱っている。これがどうして「便宜的使用」なのであろうか。しかもこの記述は『資本論』第三卷第19章の「資本の一定の部分は絶えず蓄蔵貨幣として、潜勢的な貨幣資本として、存在しなければならない。すなわち、購買手段の準備金、支払手段の準備金、貨幣形態のままに充用を待っている遊休資本として存在しなければならない」(K III. S. 328) に完全に対応している。もう一方は「貨幣の還流運動」について述べている所であり、「事業が新たに開設されるときには、生産資本家の鑄貨準備から支払われた……」¹²⁾として、ここでも「鑄貨準備」は「購買手段の準備金」の意味で用いられている。「ノート」の記述自体は三宅も示しており、「明らか」なのは「ノート第17冊」でもマルクスは「鑄貨準備」を「購買手段の準備金」の意味で用いているということだけであり、これは「ノート第15冊」の記述とも完全に対応するものである。まさに「この Münzreserve はさきの Reservefonds von Münze と同じもの」なのである。「便宜的使用」とあるとの断言によって明らかなったことは、三宅が「鑄貨準備」についての従来の思い込みに深く囚われているために、マルクスの記述をすなおに読むことができなくなっていることである。

他方では、公表用の文でないことは「原初稿」であれ、「ノート第15冊」であれ、あるいは『資本論』第二・三卷であれ、程度の差こそあれ同じことである。確かに非公表用の文であれば、不正確、不注意な表現や用語法が見られても不思議ではないのだから、そうした可能性には充分留意しなければならないであろう。にもかかわらずこれまで三宅は、これらの非公表用の文でも、問題になっている一連の術語の使用がマルクスによっていかに厳密に区別されているかを力説してきたのではなかつたらうか。こうした釈明は「あまりに便宜的すぎる」ものである。

『批判』の「b 支払手段」の始めの部分でも「a 貨幣蓄蔵」を総括して「貨幣がこれまで流通手段から区別された二つの形態は、一時停止させられた鑄貨の形態と蓄蔵貨幣の形態とであった。第一の形態は、W—G—Wの第二環である購買G—Wが一定の流通領域の内部では一連のあいづぐ

11) MEGA, II/3.5, S.1698.

12) MEGA, II/3.5, S.1735.

購買に分裂せざるをえないということ、鑄貨の貨幣への一時的な転化のうちに反映した。(中略) 鑄貨準備と蓄蔵貨幣とは、非流通手段としてのみ貨幣である……」(S. 199; 115 強調 井汲)と簡潔に述べられている。三宅説に従えば、「鑄貨の準備金」はここでの「流通手段から区別された」貨幣の形態には含まれていないことになり、どこかに蒸発してしまっている。それともここでは「鑄貨準備」といわずに「鑄貨の準備金」というべきだったのであろうか。この記述が「a 貨幣蓄蔵」の総括である限り「一時停止させられた鑄貨の形態」とは「鑄貨準備＝鑄貨の準備金」であり、「蓄蔵貨幣」は「それ自体としての蓄蔵貨幣」¹³⁾であることは明白であり、ここでも前半・後半分離説は否定される。更に数頁後に、支払手段の「準備金の形成は、もはや蓄蔵貨幣の場合のように流通それ自体にとって外的な活動としても、また鑄貨準備の場合のように鑄貨の単なる技術的停滞としても現われない……」(S. 208; 123)と「鑄貨準備」が登場し、これは「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」とびったり対応するので、その点だけを見れば三宅説に従って理解できないことはないが、それ以上の積極的理由は見当たらない。「鑄貨の準備金」なる語がただの一度しか登場しない理由は余りにも単純であって、マルクスは単に、初めに *Reservfonds von Münze* と書いた後で、次からはこれを縮めて便宜的に *Münzreserve* と書いたにすぎない。三宅も恐らくかつては単純かつ正当にそう考えていただろう。

問い直されるべきは、むしろ流通手段規定の内に含まれてしまう「消え去りゆく貨幣存在 (*verschwindendes Geldsein*)」(S. 180; 94)¹⁴⁾へと解消してしまうような我々の「鑄貨準備」概念なのであるが、実際こうした概念は、この「鑄貨。価値章標」の項で述べられている「消え去りゆく貨幣存在」に完全に引きずられて「鑄貨の準備金」を解釈した結果得られたものなのである。

13) 「それ自体としての蓄蔵貨幣」については本文「IV-3」参照。

14) 「Verschwinden」の訳語としては「瞬過的」が普通であろう。なお「消え去りゆく貨幣存在」＝「瞬過的貨幣存在」とは、本来、常に流過程にあって流通手段として流通し続けている貨幣、つまり「どの国でも経験的に与えられている」「通流する鑄貨の量がそれ以下にはけって低下しないという水準」(S. 180; 93)にある鑄貨が経過する形態である。すなわち常に流過程にあるといっても、流通する貨幣は必ずごく短時間の休止点を経過する。そうでなければ「貨幣の流通速度は無量大となることになる」(上 S. 206)。このように瞬過的にのみ休止点にある貨幣は、まさに、再び流通に向って「消え去りゆく」貨幣といえる。ただ、常に流過程にあって流通手段として流通し続けている貨幣、通流する鑄貨の量がそれ以下にはけって低下しないという水準にある鑄貨とはいっても、それは総量としてそうなのであって、同一の貨幣片が常に流通手残として流通し続けているとは限らない。つまり $W-G \dots G-W$ の過程的統一が成り立っていても、 $W-G$ の G と、それに続く $G-W$ の G が同一の鑄貨であるかどうかはわからないことであるしどうでもよいことである。だから「消え去りゆく貨幣存在」も個々の貨幣片を捉えるものではない。また、流通貨幣量がこの最低水準を越えている場合でも、その状態が維持されている限り、流通している貨幣は $W-G$ の後に短時間の休止点を経過しただけで、引きつづいて $G-W$ の過程を通過していることになる。この休止点にある貨幣は本来の「消え去りゆく貨幣存在」と区別することはできない。それが個々の貨幣片を捉えるものではない点からいってもそうである。この貨幣も当然「流通手段」であって「蓄蔵貨幣」ではなく、流通手段である限り常に「消え去りゆく貨幣存在」を経過していることになる。本論では括弧つきで「消え去りゆく貨幣存在」という場合は、つねにこの拡張された意味で用いる。どの場合でも、流通手段の量も鑄貨準備の量も不変の儘でありながら、貨幣片 A が流通から引き上げられて鑄貨準備となり、次には A の代りに鑄貨準備であった貨幣片 B が流通に投入されるということがあり得る。流通貨幣量はただ総量としてのみ把握され得る。

Ⅲ. 三宅氏の鑄貨準備概念

我々は過去これまで、「鑄貨準備」と「購買手段の準備金」とを本質的に異なった概念として区別しようとしてきたが、「ノート第15冊」や「ノート第17冊」で明示されているようにマルクスにとっては両者は「蓄蔵貨幣」に含まれるべき同一の概念であった。三宅の意図にまったく反して、彼の努力によって明らかになったのはむしろこのことである。我々の「鑄貨準備」概念が誤っていたのである。

だがそれではマルクスは、1)「購買手段の準備金」は「それ自体、いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしている」(S. 198; 114) といっていることになり、それ自体矛盾していることにならないか、2) また「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」(S. 198; 114) との記述もそれ自体が矛盾していることにならないか、との新たな難問に直面することになる¹⁵⁾。

「a 貨幣蓄蔵」最終段落の「蓄蔵貨幣を鑄貨準備と混同してはならない」との言明は、同じ文中の「(鑄貨準備は) それ自体、いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしている」との言明によって補強され、これはまったく疑問の余地のない言明のように見える。鑄貨準備は蓄蔵貨幣ではないのだから、それ自体、いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしているのは余りにも当然で、わざわざいう必要もないくらいである。この言明が余りにも明解で疑問の余地がないので、これまでこれに先立つ「a 貨幣蓄蔵」の第一段落の力を、この言明と矛盾しないように解釈してきたのはまったく無理のないことであつたし、またそのように解釈してもそれなりに通じる表現であつた。だがそうすると、ここで述べられている「鑄貨の準備金」は、流通手段規定における貨幣、「消え去りゆく貨幣存在」以上の規定は受けていないものとなってしまう。このような解釈はおそらくマルクスが夢想だにしなかった解釈であろうが、『批判』の文章それ自体はそうした解釈をそれなりに可能にしているといえよう。

三宅の「鑄貨準備」概念もひたすら最終段落の言明に依拠し、この概念によってマルクスのいくつもの記述を一貫したものとして解釈しようとしてきた。しかしそのように努力すればするほど、マルクスがそのような意味での「鑄貨準備」について述べている例が殆どないこと、ついには「鑄貨準備」概念の生みの親である「鑄貨の準備金」に関する説明までもが、少なくともその主要部分については我々がこれまで考えていたような意味での「鑄貨準備」について述べたものではないことが明確になってしまった。つまり「a 貨幣蓄蔵」の第一段落は、最終段落の「鑄貨準備」に関する言明と矛盾しているように見える部分があることが明らかになったのである。しかし、余りに

15) 表現形式だけを見ても、後者については、我々は誤読している可能性がありそうである。この「a」項の題は「貨幣蓄蔵」(Schatzbildung)であるから、主題は「蓄蔵貨幣」(Schatz)である。「鑄貨準備」は少なくともその一形態あるいは関連事項として述べられていると考えられる。だとすれば普通ならば「鑄貨準備を蓄蔵貨幣と混同してはならない」というべきではないだろうかという単純な疑問がでてくる。

も疑問の余地のないように見える言明を疑うことは至難の技なので、今度は三宅は、第一段落を前半と後半に無理矢理切り離すことによって難問を解決し、何とか我々の「鑄貨準備」概念の出生証明を得ようとした。しかしこの試みが成功する見込みは全くないことは形式的な検討の中でですらすでに充分明らかになったと思われる。

そこで、むしろ「a 貨幣蓄藏」の第一段落で述べられている「鑄貨の準備金」概念に矛盾しないように、後段の「鑄貨準備」に関する言明を解釈する方が賢明なのではないだろうか、視点を転換してみる試みも考慮に値すると思われる。こうした解釈もまた、全く無矛盾なものとはいえないが、より論理的必然性があるように思われる。一見疑問の余地なく明解な上記の『批判』の記述についてのごく常識的な解釈を疑うことなく絶対視してきたことが、問題をここまで混乱させてきたように思われる。ここで形式的な側面から内容に一步近づいて、三宅の鑄貨準備概念が、どのように形成されているのかを見てみよう。

論文(下)の「五『貨幣は實際上、その機能を一時停止させられた流通手段にほかならない』の意味」の(三)で、上の表題を明らかにすることが直接の目的ではあるにせよ、三宅は、新説で「鑄貨準備」の説明部分とした「すでに見たように、流通 $W-G-W$ では、第二の環 $G-W$ は、一度に行なわれないで時間的にあいついで行なわれる一連の購買に分裂するから、 G の一部分は鑄貨として流通するのに他の部分は貨幣として休止する。」で始まる文を引用している(下 S. 210)。先に簡単にふれたように、「鑄貨準備」を説明する際、これまで三宅は意識的にこの部分を避けているように見えた¹⁶⁾。三宅の著書を初期から辿ってみると、この問題に対するためらいが見受けられ¹⁷⁾、今回の論文ではこの傾向はよりはっきりと現われている。新説においても、鑄貨準備について述べている部分としては、実は上記の部分には触れておらず、それに続く部分のみが示されている。ただ、段落を区切ろうとするならば上記の部分で区切るしかないから、ここからが新説での「鑄貨準備」についての記述だと私が判断したわけである。こうしたことは以下に見るように三宅の「鑄貨準備」概念と密接に関連しているのだが、これによって彼の概念が先に見たように「消え去りゆく貨幣存在」以上のものではないことが、一層はっきりとする。

16) 本文 S. 7. 参照。

17) 例えば、最初期の『講座 資本論の解明』(理論社1952)の「原典解説」では「ここで注意すべきことは、 $W-G-W$ において、 G の一部分は流通手段として流通するのに、他の部分は長かれ短かれ流通裡にあって貨幣として休息することである。」(第二分冊 S. 26)と述べているが、これを補筆改訂した『貨幣信用論研究』(未来社1956)の「貨幣小論」では同じ部分が「注意すべきことは、 $W-G-W$ における $G-W$ は、時間的に継起して行われる多数の購買に分離するから、 G の一部分は流通手段として流通するのに、他の部分は長かれ短かれ貨幣として休息することである。」(S. 35)とされている。「 $G-W$ は、時間的に継起して行われる多数の購買に分離する」ことが付け加えられ、「流通裡にあって」が削除されている。しかし『資本論講座 1』(青木書店1963)の「原典解説」では鑄貨準備は、自己目的としての蓄藏、準備金、貯水池の機能等について述べた後に、「このほか注意すべきこと」(S. 263)として片隅に追いやられた上で『貨幣信用論研究』と同様な説明がなされている。『資本論体系』については本文で検討する。

この引用の後で三宅は自身の(上) 216 頁での「この休止点にある貨幣は」で始まる記述を引用し、彼の鑄貨準備概念を説明している。すなわち(三宅本人の引用の仕方とはいくらか異なるが)「 $W-G \cdots G-W$ の点線部分で G は長かれ短かれ『休止点 (Ruhepunkt)』を形成する……ここで G がとっている形態に二つの種類がある。一つはこの G が流通から引き上げられている(後日ふたたび流通にはいる、流通のために予定されている)場合であって、この場合はこの G は蓄蔵貨幣形態に置かれていることになる。いま一つは、つぎの購買 $G-W$ において動く直接的準備金としてその持ち手の手元で一時流通を停止している状態にある場合であって、『批判』で鑄貨準備(Münzreserve)と呼んでいるのがそれである。」(上 S. 216 括弧内は前後の部分からの補強)

さて「この休止点にある貨幣」とは三宅の指示によれば『批判』で「流通の第一過程である販売の結果として、第二の過程の出発点である貨幣が生じる。(中略)この第二の形態での商品は、それ自身の持続的存在をもっているのだから、この結果はさしあたりひとつの休止点をなすことができる。」(161; 73)と述べているこの休止点である。この問題は差し当りは $W-G$ につづく $G-W$ が一連のあいつぐ購買に分裂することとは関係がなく、三宅が問題にしているのもこの休止点が長いかに短いかにすぎない。

興味深いことに『資本論体系』の「原典解説」では「この休止点において G は交換価値の独立的な定在として存在している。ひきつづいての $G-W$ によって補完される場合にはこの休止点での G の交換価値の独立的な定在はまったく一時的であって、流通手段という機能的定在に吸収されたのである」¹⁸⁾と述べながら、ここではなぜか、これが「鑄貨準備」であると述べていない。ここでの「交換価値の独立的な定在」にある貨幣は「消え去りゆく貨幣存在」としてのみ捉えられている。続いて「が、これに対して、過程が第一段階で中断されて、 G が流通からひき上げられると…… G はここで蓄蔵貨幣の形態に置かれることになる。」¹⁹⁾と述べ、結局ここでは「鑄貨準備」は登場しない。鑄貨準備がようやく登場するのは「貯水池」について述べられた後で、「この蓄蔵貨幣のところで注意されるべき一つの問題として、さきの休止点に一時ある G と蓄蔵貨幣形態にある G との関係ということがある」²⁰⁾としてである。どうやら「蓄蔵貨幣」が問題とされているここでは、「鑄貨準備」は本来論ずべき問題ではないと考えているように見える。

『批判』の内容を三宅流に噛みくだいた説明を試みているところでは「流通貨幣量の一部は実際に購買手段として流通しており、他の部分は鑄貨準備として停止している。またじっさい、こうした停止の状態にとどまっていることがなければ、貨幣の流通速度は無限大となることになる。この鑄貨準備の形態にあるときは」その鑄貨は「一定期間について見た現実の流通貨幣量の一部をなしている。」(上 S. 206)と述べている。ここで説明されているのはどうやら多くの購買が同時に相並ん

18) 『資本論体系 2』(有斐閣1984) S. 98.

19) 同上

20) 同上 S. 100.

で行なわれている状況であり、ここではある鑄貨は現実にある人の手から他の人の手へと移転しつつあり現実に流通しつつあるのに、他の鑄貨はたまたま受け取った人の手もとで、次の出番を待って「鑄貨準備」として停止している、しかし次の瞬間には移転し終わった鑄貨は受け取った人の手もとで、次の出番を待って停止して「鑄貨準備」となり、他方では出番を待って停止していた鑄貨が出勤して次の人の手へと移転しつつ流通する、ということのようである。「鑄貨準備」についてのこの記述を見ても、それは流通手段規定の内にある「消え去りゆく貨幣存在」としてのみ捉えられているようである。というのも「消え去りゆく貨幣存在」とはいつでも貨幣はある時間は必ず停止しているのであり、そうでなければ「貨幣の流通速度は無限大となることになる」からである。また「ある与えられた期間、たとえば一日間」(S. 170 ; 83)²¹⁾に現実に流通する貨幣量とは現実に商品流通を媒介した貨幣量であってみれば、上に見た一時停止している鑄貨は当然これに含まれる。この流通量に含まれる限りでの一時停止している鑄貨が、「消え去りゆく貨幣存在」にある貨幣なのであり三宅のいう「鑄貨準備」なのである。それは「流通手段という機能的定在に吸収された」蓄蔵貨幣の単なる否定としての存在にすぎない。

再び『資本論体系』を見ると「さらにこの問題について一、二付言しておく、マルクスが『経済学批判』で鑄貨準備について述べている場合、 $W-G$ と $G-W$ との間の一時的な中断、すなわち $W-G$ の G がこれにつづく $G-W$ に移るまえの一時的な休止という点から述べているのであって、したがってこの鑄貨準備の形態にある G は購買手段の準備金ということになるが、しかし、いうまでもないことではあるが、購買手段の準備金であればすべて鑄貨準備ということになるのではない。」²²⁾と注意している。「鑄貨準備」とは「後日ふたたび流通にはいる、流通のために予定されている」ような購買手段の準備金なのではなくて、ごく短時間だけ流通を休止している購買手段の準備金なのである。

このように見てくると、三宅のいう「鑄貨準備」とは、「つぎの購買 $G-W$ において動く直接的準備金としてその持ち手の手元で一時流通を停止している状態」にある「購買手段の準備金」であると規定しているとしても、それが内容的に「消え去りゆく貨幣存在」とどう違うのかが明白ではない。言葉の上では区別していても、質的には区別ができない。「購買手段の準備金」を「鑄貨準備」に属するものと「蓄蔵貨幣」に属するものとに2分するこうした2分法では、滞留時間の短い「購買手段の準備金」は「消え去りゆく貨幣存在」と区別のつけようがなく、「流通手段という機

21) 「ある与えられた期間」として「一日」を考えることには余りに短いとの異論もある。しかしここでは、現実に機能している流通手段の流通量を把握する際の「一日」であり、もしこの期間を1週間とか1月とか長くすると、そこには必然的に購買手段の準備金の一部分も含まれてくることになるが、もとよりこれは後でその内容を検討する「流通内にある貨幣総量の一構成部分」なのである。「一日」は「一日」でそれ独自の意味があるのであって、それが一般的に妥当か否かをいうことはできない。信用制度が発達すれば、またそこでの流通貨幣量をどう把握するかが問題となり、例えば、流通金量を節約する手段でもある信用貨幣を流通貨幣量に含ませることにも現実的な意味がある。注28も参照。

22) 前掲 S. 101~102.

能的定在に吸収された」貨幣存在を収めて「購買手段の準備金」と規定する意味もないように思われる。また上に見たような三宅の説明では、 $W-G$ につづく $G-W$ が一連のあいつぐ購買に分裂することは、鑄貨準備とは直接には関係がないことになる。

三宅が、自己の鑄貨準備概念の説明や、そのための『批判』の引用で、この $G-W$ が一系列の購買に分裂する問題を避けたがるようになったのは、この問題はもともと三宅の概念とは相入れない蓄蔵貨幣を導き入れる性質を持っているものだからのようである。しかしマルクスはこの問題との関連で鑄貨準備の形成を説明している。そこで、この一連のあいつぐ購買に分裂するような場合にも、二通りの場合があるのだとの2分法で説明してきたが、やはりその解釈の曖昧さを自覚してのことであろうか、今では鑄貨準備を購買手段の準備金とは規定していないようにも見える。しかし鑄貨準備概念そのものは基本的には変化していない。そのために、ここで三宅は、この問題から最終的に蓄蔵貨幣を消し去ろうとするかのように、かなり強引な解釈を試みる。

「マルクスがここで鑄貨準備の形成を説明するに当たって、……という説明の仕方をしているのは…… $W-G$ のつぎの $G-W$ が『一度に行なわれ』る場合でも、それが $W-G$ のあとただちになされるのでなく、その G が一時流通を停止している状態にあることはいくらでもありうることなのであるが、しかし $W-G$ の G がひきつづいて $G-W$ として運動してゆくという、流通手段の考察上いわずに本来の前提のもとでも、そのなかで一時停止しているものが生じることを説明しようとしたものと見られる。」(下 S. 212) なにやら「私が酒を飲みすぎるのは、たとえ適量を飲んだ場合でもそれは酒を飲んでいることには変わりがないのだが、しかしその場合には適量なのであって飲みすぎているのではないということを説明しようとして飲みすぎてみせるのだ」というような言い訳を聞かされているようで、よく訳のわからない説明だが、流通手段の考察上本来の前提のもとで一時停止しているものが生じることなど、マルクスがすでにずっと簡単に説明していることは三宅自身が指摘したばかりである。さらにこの一時停止している貨幣でも一方は三宅のいう鑄貨準備の形態をとり、他方は購買手段の準備金の形態をとることを自ら説明したばかりである。

いま一度『批判』を見てみよう。まず三宅が、彼の概念としての「鑄貨準備」の説明だと主張するようになった後半部分について。 $G-W$ が一系列の購買に分裂すると「 G の一部分は鑄貨として流通するのに他の部分は貨幣として休止する。貨幣はこの場合には實際上、一時停止させられた鑄貨にほかならず……」。「この場合」として問題にされているのは休止する方の部分についてであって、流通する部分ではなく、三宅ももちろんそのように説明している。ところで、問題から外されている「鑄貨として流通する」部分とは「消え去りゆく貨幣存在」の形態を一度は取った後に、(恐らくマルクスの想定では一日以内に)再び流通に復帰する部分を指しているのであって、まったく流通を休止しなかった訳ではない。それにもかかわらずマルクスはこの「鑄貨として流通する」部分を問題から外している。ところが三宅はこの「鑄貨として流通する部分」を、先に見たよ

うな「現に流通しつつある部分」のみを示すと狭く解釈しているようであり、その意味で当然のこととして鑄貨準備ではないので問題から外している。そうして「休止する」部分の貨幣の方を、三宅のいうような意味での、一方の人が受け取って、次に他の人の手に渡されるまでの間だけ、ほんの一時だけ流通を停止させられた鑄貨と解釈することによってこれを「消え去りゆく貨幣存在」へと解消させた上で、ここで問題なのはそのような一時停止させられた鑄貨、すなわち「鑄貨準備」なのだと言主張する。けれどもそのような問題であるのならば、再三述べるように、それはG—Wが一系列の購買に分裂することなどは直接には関係がない。しかし、ここでの問題は蓄蔵貨幣の諸形態なのであって「消え去りゆく貨幣存在」なのではないし、あるいは休止する部分の貨幣について、その中には「鑄貨準備」と「鑄貨の準備金」の両者が含まれるなどと述べているわけでもない。およそ購買手段の準備金として扱うことをしなくなり「消え去りゆく貨幣存在」へと解消していく三宅の「鑄貨準備」概念では、むしろ上の「鑄貨として流通する」部分の方が「鑄貨準備」に相応しことになる筈であり、G—Wが一系列の購買に分裂する問題はすなおには取り扱えないのである。こうなると「後半鑄貨準備説」にとっては、後半ではG—Wが一系列の購買に分裂する問題を軸に展開されていることは、鑄貨準備にとっては非本質的な問題のみが主題になっていることになり、致命的に具合が悪いことになる。「後半鑄貨準備説」は先に見たような強引な解釈を準備としてのみ、ようよう誕生させられたのではあるが、まわりの人間には産声さえ聞き取ることができなかったのである。

今回の論文での「鑄貨準備」と「鑄貨備蓄」とを厳密に区別して説明しようとする努力は、三宅の「鑄貨準備」概念をますます「消え去りゆく貨幣存在」へと解消していったようである。そこではもはや「鑄貨準備」は「購買手段の準備金」としては述べられておらず、他方では「購買手段の準備金」の内部区分についても触れられていない。これは一つの理論的帰結であって偶然ではないように思われる。しかしこのことによって理論的にはむしろ純化されて、「鑄貨準備」と「消え去りゆく貨幣存在」との区別のつかない区別という曖昧さがなくなった。これまでの我々の鑄貨準備の捉え方も結局はそのようなものであったことも確かである。しかしこうした捉え方は、他方ではマルクスの記述の解釈にますます無理を強要するものとなる。

三宅としては、むしろ前半部分でばかりでなく、後半部分でもまた「購買手段の蓄蔵について述べているのではないかという疑念を抱いてしかるべきはず」(下 S. 226)であったらう。結局、我々がこれまで捉えていたような「鑄貨準備」に関しては『批判』では考察の対象とはされていない。そのようなものは、貨幣蓄蔵の項で論ずべき問題ではないのであって、だからこそ三宅流に解釈され強調されてきた「鑄貨準備」は、重要な箇所ではまったく登場しないし、三宅の原典解説においてもどんどん片隅に追いやられていく運命にあったのである。

「鑄貨準備」とは、貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機によって形成される「購買手段の準

備金」に他ならない。それはまた「b 支払手段」では「支払手段の準備金」について、「c 世界貨幣」では「世界貨幣の準備金」についての考察がなされていることに対応するものと考えられよう。

ところで三宅の考えている「貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機」とは、結局「この鋳貨準備の形成がなくては貨幣流通は恒常的、連続的におこなわれえない。(中略)またじっさい、長かれ短かかれこうした鋳貨準備の状態にとどまっていることがなければ、貨幣の流通速度は無限大となることになるであろう。」²³⁾というように、貨幣の流通速度を無限大にすることは、技術的に不可能である、どんな短時間であっても必ず一度は技術的要求から流通を停止せざるを得ない、そのような「技術的な一契機」のようである。停止している時間には、流通自体の必要から生じる若干の長短があるとしても、基本的には上の「技術的」要求を基礎にしてのことである。

これに対してマルクスのいう「貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機」とは、再生産の現実の進行が行なわれるためには、流通する貨幣総量を構成する貨幣の一部分は、断えず購買手段の準備金として、現実の流通からは一時的に引きあげられている必要がある。購買手段の準備金の形成は再生産の円滑な進行のために不可避であるということを含意している。いわゆる「流通必要量」の膨張、収縮がこれに対応する。ただ、単純流通が考察の前提であるここでは、この購買手段の準備金の形成の必然性を、資本の再生産に即して積極的に展開することまではできず、ただ「貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機」として、一つのW—GがいくつものG—Wに分裂するという単純な事実の側面から、「流通の機構それ自体から生じ、流通の機構がその諸機能をはたしてゆくための諸条件をなすところの」²⁴⁾鋳貨の準備金の形成の必然性が展開されているのである。

『批判』の当該箇所注でマルクスは「ポアギュベールは……流通手段としての貨幣の機能上の定在の否定のうちに、ただちに諸商品に対する貨幣の自立化を感じている。(中略)彼が見のがしていることは、この静止が貨幣の運動の条件だということである。彼が実際に言いたかったのは、諸商品の交換価値はそれらの素材変換のただ消え去りゆく (verschwindende) 形態としてのみ現れるにとどまるべきで、けっして自己目的として固定されてはならない、ということである。」(S. 190; 104-05) と述べているが、この注の意味するところはおそらく、鋳貨は「消え去りゆく貨幣存在」を否定されれば、ただちに「自己目的として固定され」というものではなく、鋳貨準備＝購買手段の準備金としての存在形態が貨幣が流通手段として運動しうるための不可避の条件をなしている、ポアギュベールは販売と購買の分離が、蓄蔵貨幣形成の契機となることには気づいていたが、鋳貨準備としての蓄蔵貨幣の形成が貨幣流通の不可欠の契機であることには気づいていない、という意味であろう。三宅もこの注の「彼が見のがしていることは、この静止が貨幣の運動の条件だということである」の部分を引用している(上 S. 224) が、三宅の考える貨幣の運動の条件では、

23) 前掲 S. 100.

24) MEGA, II/2, S. 31.

この静止がなければ「貨幣の流通速度は無限大となることになる」とまったく平板化されてしまうことになり、批判の意味を見のがしてしまうことになる。

同じ文意の文章を、異なった内容についての記述であるとしてそれを確定しようとした三宅の論文での努力は、彼の意図とはまったく異なった結論に至らざるを得ない。しかしそのことが序論で示したような重要な問題を提起したのである。ここまできて、ようやく視点を変える準備が整ったばかりであって問題は未だに積極的には解決されていない。

Ⅳ. 『批判』の解釈²⁵⁾

1. 自己矛盾する存在としての鑄貨準備

『批判』の「3 貨幣」では、蓄蔵貨幣の形成の内に「貨幣の資本への転化」が必然的に内包されることが論理展開の底流をなしており、蓄蔵貨幣のいかなる契機が自らを資本に転化しようとするのが問題なのである。貨幣蓄蔵はその転化を媒介するものとして把握されている。「循環G—W—Gは、貨幣と商品という形態のもとに、いっそう発展した生産諸関係をひそめているのであって、単純流通の内部では、いっそう高度の運動の反映であるにすぎない。だからわれわれは、流通手段とは区別した貨幣を、商品流通の直接的形態であるW—G—Wから展開しなければならない。」(S. 187; 102) これが問題の基本であることを忘れてはならない。従って、ここでは三宅のいうところの「鑄貨準備」など問題になりようがないことはすでに三宅自身が意識しているところである。問題になるのは蓄蔵貨幣の諸形態である。

商品流通における販売と購買の分離は、流通の技術的条件によって流通手段を貨幣に転化させ、鑄貨準備の形成を必然化する。鑄貨準備は流通を一時停止させられてはいるが、しかしそれは流通のために予定されており、流通への復帰を前提としてのみ流通を停止している。「その形成・配分・解消・再形成はつねに交替するのであって、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する」。鑄貨準備とは一方では絶えず鑄貨であることを自己否定している鑄貨であり、この限りでは蓄蔵貨幣であり、他方では絶えず蓄蔵貨幣であることを自己否定している蓄蔵貨幣であり、この限りでは流通手段＝鑄貨である。例えば『資本論』第Ⅱ巻 第2章「第1節 単純再生産」で「これらの買い(g—w)は分散していて、いろいろに違った時期に行なわれる。したがって貨幣は、一時的に、日常の消費のための準備金または蓄蔵貨幣の(Geldvorrats oder Schatzes)形態で存在する。というのは、流通を中断された貨幣は蓄蔵貨幣形態にあるわけだからである。蓄蔵貨幣としての一時的形態をも含めての流通手段としてこの貨幣が行なう機能は……」(K II. S. 71 括弧内および強調 井汲)と述べられている、この「準備金」は間違いなく「鑄貨準備」である。それは蓄

25) 以下では「鑄貨準備」「鑄貨の準備金」「鑄貨備蓄」は特に必要のない限り区別せず、すべて「鑄貨準備」と記す。

蔵貨幣であると同時に流通手段として、それ自体矛盾するものとして規定されている。あるいは「原初稿」でも「蓄蔵貨幣の……第一の機能は、鑄貨の準備金として役立つというそれであった。この属性の場合には、それはあらかじめ保持している流通手段として (als ready gehaltenes Circulationsmittel), すなわち購買手段として機能することができる」²⁶⁾として、鑄貨の準備金は流通手段としての機能を「あらかじめ保持している」ものとして捉えられている。この自己矛盾こそが鑄貨準備の存在様式である。鑄貨準備はそのような存在である限り、それは流通手段であることを否定されていながら、同時に「それ自体いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしている」。

2. 流通している現実の金量と流通内にある貨幣量

ところで「いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分 (einen Bestandteil der stets in Zirkulation befindlichen Gesamtquantität Geld)」(S. 198 ; 114) といっている場合の「いつも流通内にある貨幣総量」とは、通説では「2 流通手段」で述べられている「価格の実現のために、したがってまた商品の流通のために必要な金量 (erheischte Goldmasse)」(S. 170 ; 83), 「流通している現実の金量 (wirkliche Masse Gold)」(S. 171 ; 83), あるいは『資本論』第 I 巻での「流通手段として機能する貨幣の量 (Mass des als Zirkulationsmittel funktionierenden Goldes)」(K I. S. 133) すなわち、いわゆる「流通必要金量」と同じであると見ているが、そう捉えると「鑄貨準備」を「消え去りゆく貨幣存在」へと解消させなければならないことになってしまう。

「流通内にある貨幣総量」は、ある程度の長期間についてみると、具体的に捉えることができる。流通している現実の金量は、商品流通の必要に応じて日々変動するので、ある程度の長期間、例えば一年の間には日常経験的に知られるその最大量が流通手段として機能するために必要とされていることになる。それだけの量の貨幣が、いつでも流通手段として機能し得るものとして流通のために準備されていなければならない。そうした貨幣は流通の条件をなしており流通との関わりの中でのみ存在している。ある一日にはそのうちのある部分が、他の一日にはより多くの、あるいは少ない部分が現実に流通手段として機能するのであり、流通していない残りの部分は鑄貨準備の形態にあることになる。但し現実には、この貨幣の総てが流通手段として現実に機能するとすれば、鑄貨準備が全く存在しないことになる。従って更にそれ以上の鑄貨が鑄貨準備として待機している必要があることになる。「貨幣が鑄貨としてたえず流れるためには、鑄貨はたえず貨幣となって凝固しなければならない。鑄貨のたえまない流通の条件は、鑄貨が流通の内部でいたるところで発生するとともに流通の条件をなす鑄貨の準備金——その形成・配分・解消・再形成はつねに交替するのであって、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する——という形をとって、大

26) MEGA, II/3. 5, S. 1575.

なり小なりの部分がたえず停滞することである。」とは、具体的にはそういう事態を指している。この、長期的にみて流通手段が流通手段として現実に機能し得るために存在していなければならない貨幣総量、すなわち流通手段を主たる構成部分とし、鑄貨準備を従たる構成部分とする貨幣総量が「流通内にある貨幣総量」なのである。それぞれの構成部分の構成割合は日々変動する。一日の間には現実に流通しておらず、現実に商品流通を媒介していても、流通の条件をなしており、流通を予定されている購買手段の準備金＝鑄貨準備として形成された貨幣も流通手段と同様に流通に拘束されており、あるいは封じこめられており、その意味で、蓄蔵貨幣でありながら流通内にある貨幣総量の「一構成部分」となっているのである。それは広い意味で流通の内部にはありながら現実に流通していない部分なのである。「流通内にある貨幣総量」は、そのように把握されて初めて現実的になる。

しかし、上の「日常経験的に知られるその最大量」といっても、それ自体はまた、決して固定された量ではなく、流通の必要に応じて変動する量であり、仮に流通手段の流通量はその量を越えるならば、それ自体としての蓄蔵貨幣が鑄貨準備の不足を補填するか、あるいは直接に流通手段として出動して、そのことによって「流通内にある貨幣総量」自体が増大するのである。逆の条件の場合は、逆の結果に至るだろう。つまり「流通内にある貨幣総量」は「流通している現実の金量」の変動を前提として自らの内に内包しつつ、それ自体もまた、流通の必要にしたがって変動する量なのである。

これに対し、「流通している現実の金量」いわゆる流通必要金量とはすでに見たように、一日なら一日の間に現実に流通した、商品の流通を現実に媒介した流通手段としての貨幣、現実に流通手段として機能した流通手段の流通量だけを示している。

「流通内にある貨幣総量」には、蓄蔵貨幣ではあるが「貨幣流通それ自体の単に技術的な一契機」によって蓄蔵貨幣として形成されている部分である鑄貨準備を含むのであって、それは本質的に流通過程の必要によってそこに拘束されていることによるのみ蓄蔵貨幣なのであり、蓄蔵貨幣の否定としてのみ蓄蔵貨幣なのであるから、これを流通内にある貨幣の一構成部分として把握しているのである。

いわゆる「流通必要金量」と「流通内にある貨幣総量」とを漫然と同一視してきたこれまでの通説的解釈に対し、より有機的な流通必要金量概念が要求されよう。

こうした解釈は何等不当なものではなく、例えば先に『資本論』第Ⅱ巻に見たように「蓄蔵貨幣としての一時的形態をも含めての流通手段として」の貨幣は流通内にある貨幣総量の一構成部分であるし、あるいは「原初稿」での、価値章標による貨幣蓄蔵について三宅が詳しく検討している（上 S. 210-21）ように、価値章標が流通の外に出られないという場合の「流通の内部」には鑄貨準備＝鑄貨準備としての停滞が含まれている。すなわち「価値章標は流通の中に封じこめられてお

り……（中略）鑄貨は……単なる価値章標としては、ただ流通を通じてだけ、また流通のなかでだけ存在しているのである。貯蔵される場合でさえ、それはただ鑄貨として貯蔵されうるにすぎない。

（中略）流通の過程それ自体から生じ、そして本来は流通の休止点であるにすぎないところの貨幣蓄蔵の諸形態——すなわち流通のために予定されている鑄貨備蓄としての、または国内鑄貨自身で行なうべき諸支払のための準備としての貨幣蓄蔵の諸形態——のほかには、ここではそれ以外の貨幣蓄蔵はまったく問題となりえない。²⁷⁾

これについて三宅は「なお、この『流通のなかに封じこめられている』とか、『流通のなかでだけ存在している』というのは、流通場裡でたえず……流通しているものなのだという意味ではない。また、つねに流通貨幣量をなすものとして存在しているのだ、という意味でもない。」（下 S. 215）と述べ、更に「流通貨幣量というのは流通内にある貨幣量であり、……鑄貨準備は……流通貨幣量の構成部分をなしている。この『流通内にある』という意味と、価値章標は流通のなかでしか、つまり『流通内』でしか存在しない『流通内』に封じこめられている、というのとは、同じく『流通内』——ドイツ語でいえば in Zirkulation——であるが、その意味する内容がちがうのであって、後者の場合は、流通を離れては存在しない、流通にとってしか存在しない、流通のためにしか存在しない、そういう役割に限定されている、ということなのである。」（下 S. 215）と念を押している。同じく「流通内」という表現が用いられている場合でも、その意味する内容がちがう場合があることは一般的にいえばその通りであり、「後者の場合」については大方は妥当な説明といえようが、この場合には前者と後者とを区別すること自体はまったく当を得ていない。もし鑄貨準備についての固定観念に邪魔されることがなかったならば、「鑄貨準備」が「流通内」にあるという意味と「価値章標」が「流通内」にあるという意味とは、基本的に同じであるということを理解したであろう²⁸⁾。

このように自己矛盾的な存在であることが、鑄貨準備を形式的に把握することを困難にする。鑄貨準備の規定にとって、三宅のこのような流通手段の「技術的な」滞留時間の長短が主要な問題なのではない。

「原初稿」『批判』『資本論』「ノート」の間での記述に相違があるように見えるのも、三宅の主張するように、「鑄貨備蓄」と「鑄貨準備」あるいは「鑄貨の準備金」と「鑄貨準備」とが異なった概念だからでもなければ、広狭二義説のように「蓄蔵貨幣」概念の違いがあるからでもなく、鑄

27) MEGA, II/2, S. 30-1.

28) 「鑄貨・価値章標」の項での「ひとたび流通に入った紙券は、これを流通から投げだすことは不可能である。というのは……紙券は流通の外では、すべての価値を、使用価値をも交換価値をも失うからである。」(S. 184; 98)との記述での「流通」の意味も、上記の意味に理解した時に、初めてよく理解できる。ただ、そう理解するとそこでの流通貨幣量の捉え方も、これまで大方にはそう理解されてきたように、現実に流通している流通手段の流通量として捉えるのは適切ではないだろう。ここでの『批判』の記述からは、どう解釈すべきかは明白とはいえないが、この場合の流通貨幣量はどのように捉えるのが最も適切か、再検討が必要とされよう。

貨準備自体のこの自己矛盾的性質によるのである。なお「原初稿」『批判』と『資本論』「ノート」との間での論理段階の相違による概念の相違についての考察は、本論での課題ではないが、対象の発展にしたがって、概念がより豊富になることは当然のことであろう。

三宅はこうした矛盾した存在に対し、二つの術語に役割分担させることによって形式的整合性を獲得しようとしたが、その結果、絶えず配役を変えていかなければ説明がつかなくなるという袋小路に入り込んでしまった。それはただ自己矛盾する存在に関する記述について、先入観により、それぞれの場で一方の側面だけを自分の解釈に適合するように読み取っていたからに他ならない。旧説から新説への移行は、三宅説の当然の帰結であるが、それは単なる配役の交替にすぎない。しかしこの配役の交替から通説的解釈の限界が姿を現わしたのである。

3. Schatz と Reservefonds

ところで、鑄貨準備の形成について述べられている『批判』の「a 蓄蔵貨幣」の第一段落では「蓄蔵貨幣 (Schatz)」という術語は使われていない。わずかにスミスの言葉として「貯えて (vor­rätig)」との表現がある程度である。しかし、この項の標題は「貨幣蓄蔵 (Schatzbildung)」であり「貨幣蓄蔵」という術語は貨幣蓄蔵の様々な形態を一括して指している。「原初稿」の「貨幣蓄蔵……には、多様な種類があることは、明らかである。」²⁹⁾と述べている所では、鑄貨準備と支払手段の準備金の形態を「貯蔵 (aufhäufung)」と述べているが、恐らく「本来の貨幣蓄蔵 (eigent­lichen Schatzbildung)」と区別するためだろう。『批判』でもはっきりと「鑄貨の準備金 (Resrve­fonds)」とあってあるのだから、あえてそれが「蓄蔵貨幣」の一形態であるといわなくとも、本来の、あるいはそれ自体としての蓄蔵貨幣とは区別されると考え、さして気にしなかったのかも知れない。つまり Resrvefonds という語からは、単に消え去りゆく (verschwinden) ような存在ではない「準備金」であることは自明であるし、これは Schatz の Bildung の一種ではあるが、Resrvefonds としての Schatzbildung は、eigent­lichen Schatzbildung とは容易に区別されると思ったのだろう。これに対して「蓄蔵貨幣」という術語は『批判』では特に断らなくても主として本来の貨幣蓄蔵によって形成される、「審美的形態」をも含めた「それ自体としての蓄蔵貨幣」を指す場合に用いられているのだが、マルクス自身はここでは「それ自体としての蓄蔵貨幣」という語を使ってはいない³⁰⁾。いずれにせよ、本来の貨幣蓄蔵あるいはそれ自体としての蓄蔵貨幣と明

29) MEGA, II/2, S. 31.

30) この点から、この場合「Schatz」の訳語に「蓄蔵貨幣」を当てるのが適当か否かが問題になり得るし、実際にこの訳語が解釈に混乱を生じさせる原因にもなっていると思えるが、ここでは慣習に従っておく。マルクスが、ここで「それ自体としての蓄蔵貨幣」といわない理由については次の「4.」を参照されたい。しかし本論では区別のために便宜上「それ自体としての蓄蔵貨幣」なる用語をこれまでも用いたし、これからも用いる。なお「財宝」が当てられている場合もある (S. 192, 193; 107, 108) が、これは一般的とはいえない。

確に区別するための表現があれば誤解は避けられたであろう。「絶えず蓄蔵貨幣であることを自己否定している蓄蔵貨幣」とでも、一言簡単な規定を与えておけばよかったように思う。

4. それ自体としての蓄蔵貨幣

貨幣へ転化した鑄貨は、当面使用目的の特定しない貨幣として、あるいはより積極的に自己目的化された貨幣として、「それ自体としての蓄蔵貨幣 (Schatz als solcher)」を形成する。流通から引上げられたまま再び流通へと向かうことを否定した貨幣は、それ自体としての蓄蔵貨幣へと凝固する。しかしこのようなそれ自体としての蓄蔵貨幣は「貨幣の資本への転化」の契機を自己否定するものであるから、資本制生産の発展と共に重要性を失う。

なおここで注意すべきは「a 貨幣蓄蔵」では「鑄貨準備」および「それ自体としての蓄蔵貨幣」のみが考察されており、「支払手段の準備金」や「世界貨幣の準備金」は未だに考察の対象とはなっていない点である。従って「それ自体としての蓄蔵貨幣」とはいつても、それはこの段階では「支払手段の準備金」や「世界貨幣の準備金」を排除する概念内容を持ってはいないのである。「b 支払手段」の始めでも「貨幣がこれまで流通手段から区別された二つの形態は、一時停止された鑄貨の形態と蓄蔵貨幣の形態とであった。」として、これから更に多様な形態が考察されなければならないことを示唆している。「a」で「それ自体としての蓄蔵貨幣」とはいわずに敢えて「蓄蔵貨幣」とのみ表現したのはあるいはこうした理由によるものかもしれない。

5. 蓄蔵貨幣の貯水池

蓄蔵貨幣は、不断に流通量を変動させる貨幣流通を可能にする条件としては貯水池として機能する。ところで『批判』の「a 貨幣蓄蔵」では、この「蓄蔵貨幣の貯水池」を構成する貨幣はどのような規定における貨幣なのかが、必ずしも明白ではない。鑄貨準備を購買手段の準備金であると理解した場合に一番やっかいなのはこの問題である。幾つかの解釈が可能であるが、どこにも難点のない解釈は不可能であるように思われる。以下は私なりの解釈であって、他の解釈の可能性を否定しようとするものではない。

ここでは、この貯水池の機能を果たすのは「それ自体としての蓄蔵貨幣」であると述べられていると解釈するのが通説であろう。ただ先に述べたように「それ自体としての蓄蔵貨幣」は、この段階では「支払手段の準備金」や「世界貨幣の準備金」を排除する概念内容を持ってはいないのでから、この段階で、たとえ貯水池の機能を果たすものを「それ自体としての蓄蔵貨幣」と規定していたとしても、それをもって直ちに一般に「それ自体としての蓄蔵貨幣」のみが貯水池としての機能を果たすのだとマルクスが述べていたことにはならない。しかし以下に見るように、ここで流通手段に対して貯水池の機能を果たすものとして示されているのは、むしろ直接的には鑄貨準備

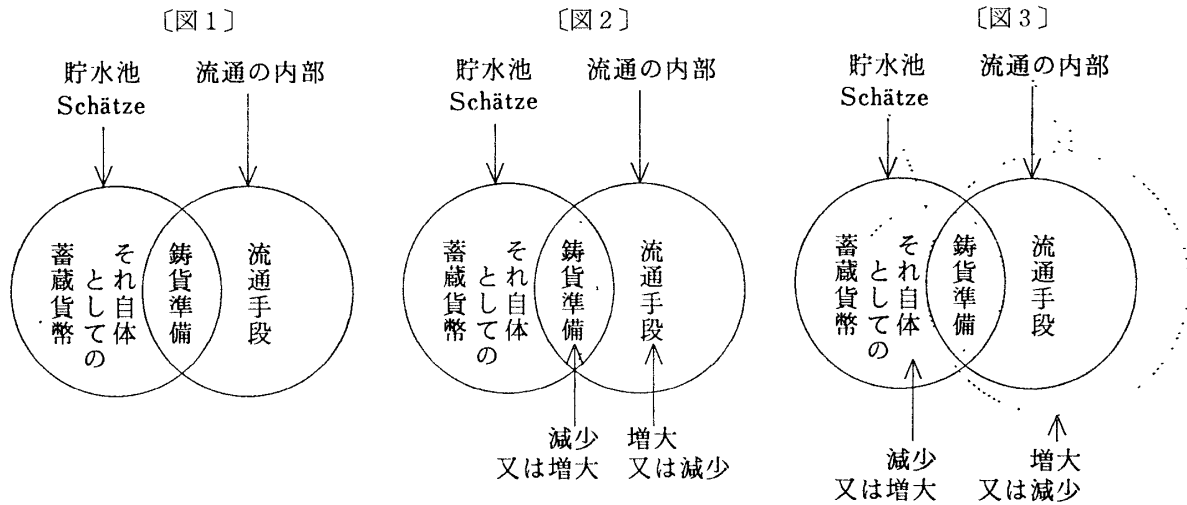
なのであって、これに対して「それ自体としての蓄蔵貨幣」は間接的に機能するものとされているものと思われる。

「貨幣蓄蔵のいまひとつの形態」としての「審美的形態」(S. 196 ; 112) について述べる直前に「金属流通それ自体の内部での貨幣蓄蔵の特有な経済的機能は、われわれはすぐこれを考察するであろうが、そのまえに貨幣蓄蔵のいまひとつの形態を述べておこう。」(S. 196 ; 112) と述べているが、この「貨幣蓄蔵の特有な経済的機能」とは貯水池の機能である。ここで「金属流通それ自体の内部」にある貨幣とは、恐らく、現実に流通手段として機能している貨幣と鑄貨準備とであり、それは第一段落ですでに「流通している鑄貨量の個々の構成部分は、たえず交互に、あるいは一方の、あるいは他方の形態で現われる。」と述べられていることからしてもそうであろう。そこで「貨幣蓄蔵の特有な経済的機能」を果たすのは文字通りに読めば鑄貨準備であるということになる。ところで「b 支払手段」でも「準備金の形成は、貨幣蓄蔵の場合のように流通それ自体にとって外的な活動としても、また鑄貨準備の場合のように鑄貨の単なる技術的停滞としても現れないで」(S. 208 ; 123) として「それ自体としての蓄蔵貨幣」を流通にとっては外的なものとして排除しているが、先に述べたように「a 貨幣蓄蔵」では「それ自体としての蓄蔵貨幣」は「支払手段の準備金」等を排除するものではない点を考慮する必要がある、以下にみるように、ここではそれは必ずしも「流通それ自体にとって外的な」ものとして貯水池の機能から排除されてはいないようである。

さて、貯水池の機能のところ「流通する貨幣の総量 (die Gesamtquantität des zirkulierenden Geldes)³¹⁾」(S. 198 ; 113) と述べているのは流通手段として流通している現実の金量であろうが、つぎの「これは一国にある貨幣の総量の、流通内にある貨幣の量に (zur Quantität des in Zirkulation befindlichen Geldes) 対する比率が、たえず変動するという条件のもとではじめて可能なのである。」(S. 198 ; 113) での「流通内にある貨幣の量」は、この段落のしめくくりの部分にある、問題の「流通内にある貨幣総量 (in Zirkulation befindlichen Gesamtquantität Geld)」と同様に、日々変動している「流通している現実の金量」を内包しつつも、先に述べた意味での「流通内にある貨幣総量」を示していると解釈すべきであろうと思われる。

ところで上の「たえず変動するという」「この条件は貨幣蓄蔵によって満たされる。」(S. 198 ; 113) のだが、貯水池の機能について述べられているここでは、Schatz は「流通している貨幣の蓄蔵貨幣への凝固」(S. 198 ; 114) と述べられている1カ所以外では Schätze と複数形で記されている。すなわち、この機能を果たす蓄蔵貨幣の形態は複数であることが示唆されているのであるが、これまでに概念規定されているものは、鑄貨準備とそれ自体としての蓄蔵貨幣だけであり、ここではこの両者がともに貯水池として機能するものと想定されているのではないだろうか「図1」。

31) MEW では「Goldes」と記されているが、MEGA の校訂に従って訂正。



その中で鑄貨準備は「その形成・配分・解消・再形成はつねに交替するのであって、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定住する」という形をとって、現実に流通している流通手段との関連で直接的に貯水池の機能を果たし「図2」、これに対し、それ自体としての蓄蔵貨幣は流通内にある貨幣総量との関連で間接的に貯水池の機能を果たし、こうして蓄蔵貨幣の全体（Schätze）としては、流通内にある貨幣総量との関連で貯水池の機能を果たすものとして捉えられているものと考えられる「図3」。ここで問題なのは「蓄蔵貨幣の貯水池」という独自の機能なのである。例えば現実に流通している流通手段の量が増大すれば、それは直接には鑄貨準備からの流通手段への流出によるものであるとしても、そのことによって鑄貨準備の量が減少するとは限らない。流通手段の補充は蓄蔵貨幣全体から流通内にある貨幣総量に対してなされ得るからである。なお上に「流通している貨幣の蓄蔵貨幣への凝固（Die Erstarrung）」(S. 198; 114)と述べられている所では Schatz と記されていることを指摘したが、鑄貨準備へは一時的に転化するのに対して「それ自体としての蓄蔵貨幣」にはまさしく凝固するのであるから、この場合は Schatz なのであろうと思われる。なおまた、この段階ではまだそれ自体としての蓄蔵貨幣から分離されていない蓄蔵貨幣の諸形態である、支払手段の準備金や世界貨幣の準備金も Schätze という表現のうちに示唆されているように思える。

貯水池の機能についての記述の終り近くにしめくくりとして、問題の「蓄蔵貨幣（Der Schatz）」を、それ自体いつも流通内にある貨幣総量の一構成部分をなしている鑄貨準備と混同してはならない、他方、蓄蔵貨幣と流通手段との能動的関係は、その（貨幣）総量の増減を前提するのである。」(S. 198; 114) がくる。この部分は貯水池の機能を述べている段落での言明であり、その関わりの中でのみそれが意味するところを理解すべきであろう。

鑄貨準備は準備金でありその意味では蓄蔵貨幣であり、現実に流通している流通手段に対しては貯水池の機能を果たすものとして対応している。他方ではこの鑄貨準備の形態にある貨幣はそれ自

体は流通していないにもかかわらず、流通している現実の金量＝貨幣量とともに流通内にあって増減している貨幣総量に属し、その一構成部分となっている。鑄貨準備とは常にそのように矛盾した存在である。これに対して、それ自体としての蓄蔵貨幣 (Schatz) は更にその外側において、流通手段＝流通している現実の金量との能動的関係としては、流通内にある貨幣総量の増減を前提にしてやはり貯水池として機能している。問題の言明は、ここでこの両者、鑄貨準備とそれ自体としての蓄蔵貨幣とを混同してはならないと、同じ貯水池機能の中での区別を示しているのである。鑄貨準備は流通している鑄貨量の構成部分であることはすでに第一段落で述べているが、そのことがここで再び強調されなければならないのは、そうでありながら鑄貨準備が蓄蔵貨幣であり貯水池の機能を果たしているからなのであって、その逆なのではない。同じ貯水池の機能を果たしているそれ自体としての蓄蔵貨幣とは、流通手段との関わり方が違うことを強調しているのである。そして最後にこれを補強するように「すでに見たように、金銀製品は、貴金属の流出水路をなすと同時に、その潜在的な供給源をもなしている。」(S. 198; 114) 以下の記述が続き、「a 貨幣蓄蔵」の本文は終わる。

だからここでいいたいことは決して、通説で理解されているように鑄貨準備は蓄蔵貨幣一般ではないことではない。鑄貨準備とそれ自体としての蓄蔵貨幣の両者は同じ貯水池の機能を、それぞれ異なった役割で果たしている蓄蔵貨幣であって、そのところを混同しないように戒めたのである。『批判』では、単に「蓄蔵貨幣 (Schatz)」といている場合は、殆どの場合「それ自体としての蓄蔵貨幣」を指していることは先に述べた。

このように解釈して初めて、ここで「流通内にある貨幣総量」と「流通手段」とを区別して、このような回りくどい表現をしている理由が理解できる。このように解釈したときに、三宅が批判する、『経済学批判』や『資本論』の、第三節「貨幣」「a 貨幣蓄蔵」のなかでマルクスが述べている貨幣蓄蔵者によって蓄蔵されている貨幣は、果たして貯水池の役割をするだろうか(上 S. 226)との「世上」で持たれている疑問³²⁾は自ずと解消するだろう。

ただし、概念がより豊かになるこれから後の記述では、それ自体としての蓄蔵貨幣や貯水池はこれとは異なった規定を得てしかるべきものと考えられる。蓄蔵貨幣を、それ自体としての蓄蔵貨幣と鑄貨準備だけによっては規定できないことからしても、それは当然のことである。

鑄貨準備についてのこうした解釈は、これに続く支払手段や世界貨幣の準備金と共に考察した場

32) 三宅が挙げている例は、「マルクス経済学レキシコンの栞」No. 12.(前掲『マルクス経済学レキシコン』13 付録)(1982.6) S. 10~11.によるものである。なお、この「栞」では、「なぜマルクスは鑄貨準備金を貨幣すなわち第三の規定性における貨幣と考えたのだろうか、という疑問」「なぜマルクスは鑄貨準備金に関する立ち入った考察を、『貨幣蓄蔵』と題する項目のなかで行なっているのだろうか、という疑問」についても論じられており(同 S. 7~10)、これはこれまで我々の頭を悩ませてきた問題であるが、もちろんこうした疑問は鑄貨準備が蓄蔵貨幣であることが明らかになれば、まったく別の視点から論ぜられるべき問題である。

合に、それらとは「それ自体としての蓄蔵貨幣」の位置付けが異なっているにもかかわらず基本的には矛盾しないように思われる。逆に、これまでのような解釈では、以下に見るような鑄貨準備を貯水池の機能を果たすものとしている記述と矛盾することになる。

6. 鑄貨・支払手段・世界貨幣の準備金

「b 支払手段」の項では「ブルジョア的生産の発達につれて……一般に商品流通の領域内で形成される諸蓄蔵貨幣の一部分が支払手段の準備金として吸収される」(S. 208; 123)と述べられた後で、この準備金の大きさについて「銀行制度が発達しはじめたばかりの時代に、イギリスでは支払手段のための貯水池が、一般に流通していた貨幣のどれほど大きな部分を吸収していたか」(S. 209; 123)と述べられている。ここでは「支払手段の準備金」と「支払手段のための貯水池」とは同一とされているようである。ブルジョア的生産の発達につれて支払手段の準備金が特に重要になることは周知の通りである。

更に進んで「c 世界貨幣」では「金属の流れのうち、商品世界のそれぞれの特殊領域によってとらえられる部分は、一部は摩滅した金属鑄貨を補填するために国内貨幣流通に直接に入り、一部はせきとめられて、鑄貨、支払手段、世界貨幣のさまざまな蓄蔵貨幣貯水池に入り、一部は奢侈品に転化され、最後に残りは単に (schlechthin) 蓄蔵貨幣になる。」(S. 212; 127 強調 井汲)と述べられているが、見られるように、ここでは単なる「蓄蔵貨幣」と「蓄蔵貨幣貯水池」とは明確に区別されているが、他方では「準備金」については直接触れていない。またノート第15冊の「すでに第一分冊で示しておいたように」以下で示されている、蓄蔵貨幣の諸機能の中では「最後に、蓄蔵貨幣はそれが鑄貨、支払手段、世界貨幣の準備金として機能しないかぎり、それ自体としての蓄蔵貨幣であり³³⁾として「貯水池」については直接触れていない。しかし両方の表現を比較すると「蓄蔵貨幣貯水池」は「準備金」を指しているように見える。

従って「貯水池」の機能を直接果たすのは準備金であると捉えられているが、この貯水池へは、流通している貨幣との間に流出入があるのと同じように、それ自体としての蓄蔵貨幣との間でも貨幣の流出入がある。

ところで、鑄貨の準備金、支払手段の準備金、世界貨幣の準備金はそれぞれを概念的に分離することはできるが、現実に存在しているこれらの三者は混然一体となって存在しており、準備金一般としては確定できても個々の貨幣片をとりあげて、それがどの機能に拘束されているのかを確定することは困難である。このような意味での鑄貨、支払手段、世界貨幣の準備金の総体を総体としてのみ「蓄蔵貨幣の貯水池」として捉えるべきではないだろうか。つまり、この段階では、準備金が「鑄貨、支払手段、世界貨幣の準備金」として規定された時に、それは蓄蔵貨幣の貯水池の機能を

33) MEGA, II/3.5, S. 1576. 強調 井汲

果たすのである。

この貯水池では準備金は、流通手段として流通に復帰するもの、支払手段や世界貨幣として機能するもの、あるいは逆に蓄蔵貨幣に凝固するものもあるという多様性を持っている。このことは「a 貨幣蓄蔵」だけでは十分に展開できない。この貯水池は準備金の流通手段、支払手段、世界貨幣への出入口でもあれば、蓄蔵貨幣への出入口でもある「図4」。

「a 貨幣蓄蔵」では「それ自体としての蓄蔵貨幣」が貯水池の機能を果たすとされて、それに対して「b 支払手段」「c 世界貨幣」ではその機能から排除されているのは、すでに述べたように、「a」では未だ支払手段や世界貨幣の準備金が展開されていなかったことによるものと思われる。

おわりに

問題は、鑄貨準備は蓄蔵貨幣か否かというように立てられるべきではなく、絶えず自己矛盾する存在としての鑄貨準備が、流通内にある貨幣総量の一構成部分を成すものとして、それ自体としての蓄蔵貨幣との関連で有機的に捉えられなければならない。更にまた貨幣蓄蔵全体は、貨幣の資本への転化とのかかわりのなかで把握されなければならないが、この後者については、鑄貨準備概念それ自体を明らかにすることが目的の本稿では立入って触れることはなかった。三宅論文の「おわりに」(下 S. 221-23)を見てもわかるように、三宅の関心の中心はいわゆる「流通必要金量」にあるようであり、その視点からのみ蓄蔵貨幣を見ようとするために、「鑄貨準備を蓄蔵貨幣と混同してはならない」との言明もまたその視点から離れて見ることができずに、それがあらゆる判断の基準になったように思える。しかし三宅もよく知っているようにマルクスは、貨幣の資本への転化という視点から蓄蔵貨幣について考察しているのである。「流通必要金量」に含まれるか否かという問題に目を奪われ、それを鑄貨準備の指標としようとしていたこれまでの我々の理解は、木を見て森を見ないことによって「誤解体系」を形成していたものといえよう。

本論で行ったことは、マルクスの「鑄貨準備」概念の解釈であって、これまで我々がマルクスによるものと信じてきた「鑄貨準備」概念はマルクスのそれとは無縁のものであったことを明らかにしたにすぎない。これまでの我々の概念は、流通手段規定の内に解消される「消え去りゆく貨幣存在」に他ならず、これに「鑄貨準備」という術語を当てるべきではない。マルクスのものはマルクスに返し、これまで延々と続けられてきた論争には終止符を打ち、論点を転換すべきであろう。

〔図4〕

